『鬼女』を書き終えて

―作家が語る執筆裏話―

鳴海風

日本は終戦後七十七年である。今、突然戦争が勃発し、かつての学徒出陣、それも中学・高校生といった少年たちまでが戦地に赴くことになったら、母親たちはどうするだろう。

よく知られているように、幕末の会津でそれと似たことが起きていた。

徳川時代は、島原の乱から長州藩による米国船砲撃と禁門の変まで、二百二十五年間平和が続いた。四年後、鳥羽伏見の戦いで旧幕府軍は薩長軍に敗れ、徳川慶喜は寛永寺で謹慎、会津藩もそれにならい恭順の態度をとった。ところが、松平容保・喜徳父子の護衛が任務の、白虎隊までが前線で戦うことになった。

◉『鬼女』のテーマとストーリー

白虎隊士中二番隊の飯盛山での自刃は有名だが、彼らを送り出し、のちにそれを知った母親たちの心情はどうだったろう。

それは、母が死んで母を思い出すことが増えた私の、書かねばならないテーマになった。

しかし、実在の人物では、文献を読み、取材を続けるうちに、感情が入ってしまい自由に小説を書けそうもない。

それで、架空の人物を主人公にし、思い切ったストーリー展開の、『鬼女』の構想が生まれた。

主人公は武家の母親だ。ひとり息子を立派な会津武士に育てたいと願っている。息子が反抗期になると、それが思い通りにいかず、母親の教育熱はエスカレートしていく。

そのようなときに、会津戦争が始まる。

『葉隠』の一節「武士道と云うは死ぬ事と見付けたり」を読んでいなくても、母親の目指す立派な会津武士は、「死ぬ覚悟をもっている」でなければならない。

白虎隊に入れて喜ぶ息子を、母親は心底から信じることができない。やがて母親は、鬼のような女になる。得意のなぎなたで、息子を打ちのめし、出陣の朝には、容保父子の「盾になって死ね」と言って送り出す。あまつさえ、息子が会津武士らしい最期を遂げたか、確かめるために飯盛山へ登るのだ。

◉ 会津藩の教育制度

息子は士中二番隊に所属するから、上士の家庭である。日新館で学ぶことになる。

「ならぬことはならぬものです」の『什の掟』から、旧態依然とした人材育成を連想しがちだが、幕末の会津藩は、若者たちを海外へ送り出している。山川大蔵と田中茂手木は、樺太国境画定交渉使節に随行し、ロシアから欧州をまわって歩いた。パリ万博に徳川昭武が派遣されるときも、横山主税と海老名季昌が同行しての海外視察を命じられた。

長沼流からフランス流へ軍制改革をしたように、日新館における教育制度も変革期にあったことが推定される。

◉ 武家の暮らし

母親が鬼女になる以前は、息子を溺愛している方がドラマチックだ。そのため、町人の家から嫁に来たことにした。そして、戦争が起きるまでは、ごく普通の生活を送らせる。

が、多くの文献を読んでも、会津の武家の日常生活は断片的にしか書かれていない。

幕末の会津藩は、上士の家でも経済的にはあまり楽ではなかったようだ。女たちは機織りの内職までしていたという。当時の当たり前だが、食事などあらゆる面で男子が優先・優遇されていた。

武家屋敷を見学する時、私は日常生活を探る。たとえば、この部屋は、この道具は、この食器は誰が使ったのかと想像するのだ。

武家茶道の石州流が広まっていた会津である。数寄屋造りの茶室があってもおかしくない。会津漆器も本郷焼も、藩が育てた産業だ。上士の家では大切に使われていたろう。

◉ 二本松を訪ねて遭遇した奇跡

母親を二本松出身にしたのは、鬼婆伝説で名高い安達ケ原があるからだ。普通の母親が鬼になってしまう点が重なる。

物語の終盤、夫も戦死していて、母親は息子の死を知ったあと二本松へ行く。

本当に偶然だが、実家に想定した場所を取材中、私は会津藩士の末裔に出会った。明治以来代々書店を営んできたという。

教えてもらった菩提寺のお墓をお参りに行った。墓石には、割場の鐘が鳴った八月二十三日に死んだ父親と息子の名前、そして明治になってから死んだ三人の戒名が刻まれていた。戒名から推定すると、三人は二本松へ移ってきた母親とその義父母である。

安達ケ原の鬼婆は、実の娘を殺したことを知って気が狂い、本当の鬼婆になってしまった。私が創作した鬼女は、我が子を戦死させても本当の鬼女にはしたくなかった。